

認知症高齢者に対するコグトレ(Neuro-Cognitive Enhancement Training)の適応可能性
と「認知機能をトレーニングする」体験についての検討
－高齢者施設での少数介入事例から－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
友藤 勇輔

本研究では認知症高齢者に対する認知機能のアプローチとして、これまで主に青少年を対象に行われてきたコグトレが適応可能であることを検証することを目的とし、少数事例(3名)に対する介入を行った。介入の様子は録音してフィールドノートを作成し、介入前後に行われる認知機能検査の結果とあわせて、コグトレの認知機能面への影響や、認知機能をトレーニングすることを主眼にしたセッション体験が持つ意味について検討した。

介入事例および対照群(6名)の人数が少なかったため統計分析は用いなかったが、認知機能検査では、数唱や視覚性記憶範囲において介入事例で成績が向上する傾向が見られた。ここから、負荷は高くないものの、コグトレによって対象者の認知機能に応じた水準で注意力やワーキングメモリが賦活されていた可能性が考えられた。またコグトレのルールを理解しようとする努力も認知機能への刺激になっていたかもしれない。

フィールドノートの分析からは、セッションが認知機能だけでなく情動面でも対象者を揺さぶり、それらを通して、セッションを実施した対象者・調査者双方が独特の過程で、役割としてではない個人としての自己を関係の場に現出させていたことが考察された。